2022年度日本惑星科学会秋季講演会開催報告

2022年日本惑星科学会秋季講演会実行委員長（茨城LOC） 百瀬 宗武[1]

1. 概要

2022年日本惑星科学会秋季講演会は，2022年9月20(火)-22日(木) に対面+オンライン(Zoom)のハイブリッドで開催された．対面での講演及びポスター会場はザ・ヒロサワ・シティ会館(水戸市)であった．また9月23日(金･祝)には，ザ･ヒロサワ･シティ会館小ホールにおいて，一般普及講演会「水惑星の誕生：その起源と条件を探る」を行った．懇親会については，9月21日夕方に開催できるように水戸駅近くの会場を確保して準備を進めていたが，COVID-19の感染拡大状況を踏まえ，8月下旬に中止を決定した．

秋季講演会には264名の参加申込があり，このうち175名は会場での参加があった．195件の講演申し込みがあり，その内訳は，最優秀発表賞ノミネート10件，口頭発表108件，ポスター発表77件であった．

LOCは，茨城大学理工学研究科(理学野)スタッフの百瀬宗武，橋爪光，藤谷渉，及びWeb係の折原龍太(茨城大学理工学研究科博士後期課程在学)を中心に構成した．

2. 準備の経過

本講演会の準備は2022年1月から本格的に開始した．当初よりCOVID-19感染症対策が継続的に求められる見通しがあったことから，(1)対面開催を想定しつつ，会場設備とLOCの対応が可能な範囲でハイブリッドを取り入れること，(2)対面の懇親会の実施を模索はするものの，直前でのキャンセルに大きな支障がでない会場を確保した上で，会費の徴収を含め講演会本体とは分離してスケジュールを組むこと，以上2点を基本方針として準備を進めた．このうち(2)の懇親会については，2022年7月以降の急速な状況悪化を受けて中止したが，当初からキャンセルの可能性も視野に入れていたため大きな混乱がなかったのは不幸中の幸いであった．一方，(1)のハイブリッド開催については，今回が秋季講演会においては初の試みであったので，後ほど項を改めて少し詳しく報告したい．

参加申込に関わる各種手続きの締め切りは，以下の通りであった．

i. 2022年6月24日(金) 24:00 参加申込，発表申込，支払い，予稿原稿受付開始
ii. 2022年7月15日(金) 24:00 発表申込締切，最優秀発表賞予稿原稿の締切
iii. 2022年8月26日(金) 24:00 参加申込締切，予稿原稿締切，支払い締切

このうち ii の際には，締切の6時間ほど前からサーバー(wakusei.jp)の反応が極端に遅くなり発表申込が受け付けられなくなったため，急遽，締切を連休後の2022年7月19日(火)に延長する措置を取った．サーバー自体の障害であったためメールやホームページでの広報も不可能となり，LOCとしては慌てたが，広報専門委員会にご協力をいただいて学会twitterで発信してもらうなどの対応をとった．また，参加費の支払いについては，昨年度に実績があったイベント運営支援サイト「イベントペイ」を主に用いたが，直前の別イベントで発生したクレ

1.茨城大学理工学研究科（理学野）
munetake.momose.dr@vc.ibaraki.ac.jp

図1: 口頭発表会場の様子.

図2: ポスター発表スペースのレイアウト.

ジットカード情報漏えいを踏まえて取扱業者が行政処分を受けたことに伴い，クレジットカードでの払込を受け付けられなかった．そこで，国内在住の参加者にはコンビニやペイジーでの支払いをお願いするとともに，主に海外に在住しクレジットカードでないと支払いが困難な参加者のために，別の決済手段(Square)を急遽，並列に用意した．

上記の通り，最優秀発表賞を含む口頭発表希望には118件の応募があった．当初は，昨年度の経験を踏まえ，申込多数の場合には提出された予稿原稿の査読を通じた口頭発表の絞りこみを計画していた．しかし実際の予稿に目を通した結果，絞り込みは困難であるとの結論に達した．そこで今回は，一件あたりの発表時間枠を8分に絞った上で，全て希望通りの発表形式で実施することにした．この判断の是非については賛否両論あると思うが，行事部会を中心に，ここ数年の参加体験に基づく会員からのご意見を集約していただき，より良い形態を模索する契機になればと考えている．各発表者が時間を厳守したことや質疑応答にSlackを併用したことから，会の進行自体はスムーズであった(図1).

3. ハイブリッド形式の実施と課題

茨城LOCの人員体制が限られていたこともあり，当初より多大な労力をかけてのハイブリッド化は追求しない方針であった．しかし，2022年3月にザ・ヒロサワ・シティ会館担当者と詳しく打ち合わせを行った結果，「中継方式」のハイブリッド形式が現実的に可能であり，かつ参加者にとっても大きなメリットがあると判断し，ハイブリッド形式を基本とすることを最終決定し，2022年5月の総会にてその旨を正式にアナウンスした．本番直前の2022年9月1日午後にはリハーサルを行い，参加者に見立てた茨城大学水戸キャンパスの人員と会場を繋ぎ，発表や質疑応答が双方向で実施できるかの確認と調整を行った．

そもそも純粋な対面形式，あるいはオンライン形式と比べたときの，ハイブリッド形式のメリットは何だろうか．それは，発表及び聴講を行うそれぞれの参加者が最適な参加場所を会期直前まで自由に選べることであろう．その前提として，参加場所によらずに同等の参加体験が得られることが重要となる．さらに，多数の発表者が次々と登壇する学会講演会においては，発表者全員が確実にネットワーク接続できるような準備・サポートを対面会場において行うことは不可能である．以上を踏まえ，参加者が参加場所によらずに「ハイブリッドを意識せずに済む」方式として，会場とZoomを中継で繋ぐ方式は最適なものであったと考えている．総会から受賞記念講演に移る際にZoomホストが手薄になったことに伴うトラブルが発生した点を除けば，シームレスに会場とZoomが繋がれていたはずである．今回の会場では，中継を可能とするだけの専用ネットワーク回線や音響映像設備があったこと，配信に詳しい経験豊富な会場スタッフの助けが得られたことから，理想的な会場であった．その意味では，同様な方式がいつでも可能であるとまでは断言できないが，今回得た技術的ノウハウ，経験は可能な限り引き継ぎしたい．

最後に，ハイブリッド，あるいはオンライン形式での大きな課題として，ポスター発表が挙げられる．今回は会場でのポスター発表スペース(図2)の用意はもちろん，Zoom上でもポスター発表スペースを用意し，会期外の9月26日，27日の午前9時から午後6時までも，ブレイクアウトルームつきのZoomを稼働させた．しかし，対面会場のポスター会場の賑わいとは対照的に，Zoomスペースの利用は極めて限られていたと言わざるを得ない．これは本会の講演会だけでなく，オンラインでのポスター発表に共通する課題と思われる．この点は技術的観点に加え，企画･運営的な観点からの知恵を一層絞る必要がある．

4. 一般普及講演会

9月23日(金･祝)に開催した一般普及講演会には90名の聴衆が来場し，以下の2件の講演が行われた．

- 中村智樹氏(東北大学)「はやぶさ2が持ち帰ったサンプルが明かすリュウグウの起源と進化」
- 生駒大洋氏(国立天文台)「最新理論が予測する太陽系外の水惑星の存在度」

もともと高い関心が寄せられていた「はやぶさ2」の成果であったが，当日の午前中に，講演者である中村氏をはじめとするチームが行ったプレスリリース[1]に関する報道が広く行われ，より一層大きな興味を引く結果となった．また後半の生駒氏の講演では，水戸の名産品である納豆を題材にした小噺も交えつつ，海の起源に関する最新の研究成果が紹介されたが，こちらの関連研究も講演会からほどなくしてプレスリリースが行われた[2]．いずれの講演にも活発な質問が寄せられ，参加者にとって満足度の高い講演会ではなかったかと推察される．プレスリリースと連動したタイムリーな講演会になったことを含め，講演者の中村氏，生駒氏には，この場を借りて改めて御礼申し上げたい．

5. 終わりに

本講演会の開催にあっては，一般社団法人･水戸市観光コンベンション協会からコンベンション開催助成金･ハイブリッド開催助成金をいただくとともに，多くの助言を受けた．この助成金のおかげもあり，講演会全体を完全な収支均衡で終えることができた．茨城LOCとして感謝の意を表明する．

[1] https://www.isas.jaxa.jp/topics/003192.html
[2] https://www.eps.s.u-tokyo.ac.jp/focus20220930/